とりあえず幻想入り

おれんじスカイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とりあえず幻想入り

【Ｎコード】
Ｎ４１１７Ｍ

【作者名】
おれんじスカイ

【あらすじ】
幻想入りした主人公が世界を救う。
そんな話にできたらいいな。
ほのぼのなカンジの時々シリアス。
東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。

プロローグ（前書き）

この小説は東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。
キャラ崩壊や二次設定も含まれますので、苦手な方や嫌いな方は閲覧注意！！

プロローグ

どしん、と豪快に尻から落ちた。

我ながら恰好悪い。

目の前には見覚えがあるようなないような湖と、真赤な館が堂々と建っている。

……とてもじゃないけど日本の風景じゃない。

「おめでとう、あなたは幻想入りしたの

喜べばいいんじゃない」

背後から声がして、振り返ると空気しかないはずの空間がゆがんで亀裂ができていた。

声はその僅かな隙間から響いているようだ。

しかし俺はその不思議な現象にまるで興味を持たなかった。

重要なことは他にある。

「……幻想入り……

……幻想入り？

……幻想入りだって！？

……俺が！？

じゃあここは……」

時は少し戻ってここはまだ日本のどこかの都会らしい都会。

とある公園、ベンチに腰掛ける俺は不審者に間違いない。

なぜなら時間は２３時をもうすぐ終える頃だから。

あと一分もすれば日にちが変わるというとき。

不意の真暗闇。

なにがどうなったなんて説明できない。

なんとなくぼーっと若干欠けた満月を見てたら、突然の暗闇。

説明しようにもできない。

一分ほど闇の中にいた。

体を動かすことはできても、移動することはできない。

ふと思った。

「もしかして……落下中……？」

落下し続けた俺は尻餅をついて見事着地に成功し、

何者かの助言で『幻想入り』したという、にわかに信じ難い事実を押し付けられたのである。

そういうわけで今に至る。

「つまりここは幻想郷！

あれは紅魔館！

そして俺は……俺は……

……あれ？

俺の名前は……

俺の名前！？なんだっけ！？」

プロローグ（後書き）

はじめまして、
まずこの小説を読んできただきありがとうございます（まだプロローグですが）
初めてなので不慣れなことも多く、更新もあいまいな周期になると思いますが
これからよろしくお願いします。

一話　被害者一号

幻想郷に住むものたちは、多くが何らかの『能力』と呼ばれる特殊な力を持つ。

仮に強大すぎる力であってもこの世界ではそれは最強ではない。

幻想郷に住む主な妖怪やそのほかの生物のほとんどが反則じみた能力を持つからだ。

幻想郷の創造主と呼ばれる八雲紫の能力は『境界を操る程度の能力』。

噛み砕いていえば、要するに「自分の意思で何でも操作できる能力」ということになる。

操作といっても、人の意思を無視して肉体を操ったりという、そういった類の能力ではない。

たとえば、空間と空間の繋がりを操作する。

つまり１００ｍ離れた地点の空間同士をつなげて、瞬間移動を可能にする。（厳密には『瞬間』ではないが）

八雲紫はこれを結界という媒体を用いて、主な能力として使う。

これだけが『境界を操る程度の能力』のすべてではないが、

この能力だけで十分『無敵』といえる強さを誇るはずの妖怪だが、

その『無敵』に匹敵する強さの妖怪が他にも存在するのだ。
幻想郷ではどんな能力を持っていても最強とはいいがたい。
本来『無敵』であるはずの八雲紫が『弾幕勝負』などという遊びじみたルールで幻想郷を縛っていることからも、それは確かだ。

しかし、それを揺るがす存在が幻想郷に現れた。

魔法の森にはほとんど高等な生物はすんでいない。
妖怪でさえ苦手とするものが多いこの森には、二人の魔法使いが住む。
アリス・マーガトロイド、人形遣いと有名な魔法使い。
人形遣いで魔法使い、一見すると矛盾のように思われるが、単に人形を扱う魔法使いということだ。
普段何もすることのないアリスは、まさに普段通りにソファに横た

わっていた。

まだ日も昇って間もないというのに早速一日が面倒になってきた頃だ。

いつものことだが、この世界には本当にすること、すべきことというものがない。

たびたび異変と呼ばれる、異常現象が起こったりするのだが、

たいていは異変だと気づく頃には博麗の巫女が解決してしまっている。

本当に退屈なところだ。

もっとも魔界にいた頃とそれほど大差ないのだけれど。

「しっかし、本当に暇ね」

あまり動くことが好きでないアリスは、家事の類はともかく、他はなににしてもやりたがらない。

本来本を置くべき本棚に並べられている人形をつくることくらいにしか、興味がない。

家から出ることすらほとんどない。

人間と違って、それでも生きていけるのいうのだから当然のことかも知れないが。

「なにか異変でも起こってくれないかしら」

それでも、動かざるをえない状況になれば動くものだ。

表面上は、面倒くさいという面をしているが、心底では自分が動かなければならない状況を望んでいるのだ。

そういえばパチュリーに借りている本があったということを思い出し、

紅魔館へ出かける準備を始めた。

パチュリーに返す本を持って玄関を出た。

その瞬間、

ッドン！！

と聞いたこともないような轟音が響いた。

「え？なに？」

アリスが振り返ると、ただの木片と化した元マーガトロイド邸があった。

ロードローラーでも通ったあとのように均等に潰されている。

「な……なんなのよー！？」

動揺するアリスの後ろで気配が動いた。

気づいたアリスはすぐに振り返ったが、気配は森の中へ消えてしまった。

「……！？」

今すぐにでもあの気配を追いかるべきかもしれないが、ここは魔法の森。

いくらアリスが魔法使いとはいえ、危険であることに変わりはない。

アリスは怒りを抑えて、とりあえず紅魔館に向かうことにした。

いくら腹ただしいとはいっても、命まで賭けるわけには行かない。

どうせ行くあてもないのだから、紅魔館でとりあえず話を聞いてもらうべきだろうと考えた。

一話　被害者一号（後書き）

私情でパソコンが使えず、遅くなってしまいました（汗
流石にいきなり一月も空けたのではあれなので、
今日はがんばってできるだけ更新したいと思います。

二話　被害報告

妖怪の山の麓付近で肩を並べて歩いていた河城にとりと犬走椛は遠くから響くとてつもない音を聞いた。

「な、なんでしょうね……今の音……」

「さぁ？」

いたってまじめな質問をしたにとりに対して心底不思議そうに首をかしげる椛。

「いや、さぁ？じゃなくてお得意の遠見で覗いてくださいよ！？」

と声をかけたにとりだったが椛は既に遠くで起こった音の正体を覗いていたようだ。

「ふぅん……気の毒にねぇ」

「って、早！！」

「すごい人間もいるもんだね」

「へ？人間？霊夢とか魔理沙の仕業ってこと？」

「そうじゃなくて、また別の人間

見たことない人間だなぁ、里のものかな……？

……それはないか……」

「なにが見えたのか私にも教えてくださいよ！」

「魔法の森で家が一軒壊滅してる

それをやった犯人らしき人間が現場から離れるのが一瞬だけ見えたんだ

はっきりとは見えなかったけどね」

「？

それ……絶対人間の仕業じゃないだろ！」

「いやいや、人間ですよ」

「はぁ？どうしてそう思うんですか？」

「こう……オーラが……」

「はいはい、どこぞの新参妖怪の仕業でしょう

普通の人間にそんな力があるわけないじゃないですか

人里のものだというならなおさら」

「うーん、確かにそうだけど、でも妖怪や妖精のようには見えなかったんですが」

「それにしても、『千里先まで見通す程度の能力』便利ですね、やっぱり

人里へのお買い物についてもらってきといてなんですけど、椛は山の見張りが一番似合うね

で、その妖怪のどこが気の毒？」

「気の毒なのは家の持ち主、アリスさんまた家がなくなって……」

「あぁー……それは気の毒だね

なんにしてもさっきのものすごい音が人里からでなくてよかった

面倒はごめんだからね」

「アリスさんの心配より自分の心配ですか……」

「え？また？」

紅魔館の地下の図書館でパチュリーはおよそ悲惨なものを見る目でアリスを見た。

「やめなさい、その目

悲しくなるから……」

読書に耽っていたパチュリーが驚いたのは他でもない、アリスの家がまた全壊したということにだ。

「何度目よ、それ

いい加減冗談なんじゃないかって思えてくるのだけど……」

「知らないわよ！！

私だって冗談だと思いたいわよ……」

「こう立て続けに家がなくなるんじゃあ引っ越したほうがいいんじゃない？」

「私はあの場所がいいの！！」

「……ま、確かに魔法使いの住処としてはうってつけの場所ですもんね」

「そ、だからまたどうにか立て直すわ」

そこでやっとアリスは既に座っているパチュリーの向かいに腰掛けた。

机をはさんでより真剣な顔で話を続ける。

「それで――――」

アリスが口を開こうとしたのをパチュリーが遮る。

いかにも面倒だといわんばかりの怪訝な表情をして。

「ちょっとまって、

話すのはいいけどもうちょっとまってくれる？」

「な、なんでよ！

私は今イライラしてるの、非常にね」

呆れた、とため息をつくパチュリーを見て

アリスは少し申し訳なさそうに

「分かったわよ」

と引き下がった。

しばらくしてコンコンと大図書館の扉をノックする音がした。

「どうぞ」

パチュリーの無関心な返事を聞いて十六夜咲夜が扉をあけ入ってきた。

「失礼します、パチュリー様」

咲夜はカップに紅茶をそそいでそそくさと部屋を出て行ったが、

「悪いわね」

と一声かけたアリスに対して言った一言が余計だった。

「家一軒潰されることに比べたらこのくらいなんでもないですわ」

アリスが心底腹が立ったのは言うまでもない。

「では、これで」

そういって咲夜は部屋を出て行った。

「あんの、お調子メイドッ！！

盗み聞きしてたわねッ！！

なにが『ですわ』よ！？

上司（？）の前だからってすましちゃって！！」

アリスは八つ当たりするようにパチュリーを睨んで

「それで？
私はいつまでこの怒りを抑え続ければいいのかしら？」
本に目をやりながらやるきのない返事をする。
「……もう少しよ」
そういえばパチュリーは何をまっているのか。
さっきの気障りなメイドは何故かカップを四つも置いていった。
アリスがそんなことを考えているとさっきとは違い
今度はノックもなく、バンッと豪快な音を立てて図書館の扉が開いた。
「おーす、お邪魔するぜー」
「あらアリス、珍しいわね」
魔理沙と霊夢だ。
パチュリーがまっていたのはこの二人だったのか。
丁度カップも四つ。
ところがまっていたはずのパチュリーは悩みが絶えないとでもいいたげに若干うつむいて

「また余計なことを……」

とブツブツと言っていた。

二話　被害報告（後書き）

本日二回目の更新です。

相変わらずしょぼい文章ですが、自分なりに頑張っています。

他の作品で、主人公最強ってのをいくつか目にしたんですが、設定が面白いですね。

この話では、主人公が最強というより準主人公が最強なんですが。

主人公はほぼ最弱ですね。

三話　被害者二号

魔理沙たちが大図書館に到着したのと同時刻、紅魔のそばの湖では氷精がなにやら退屈そうに昼寝をしていた。

「う、うわーーーー、

ちくわだー、巨大なちくわが降ってくるぞーーー！！」

「そーなのかー」

寝言を言う氷精チルノのそばでは闇を操る妖怪、ルーミアが同様に寝転がっていた。

勿論ルーミアは眠ってはいないが。

「なーにやってんだ、お前ら」

男勝りの口調で二人（？）に声をかけたのは、紅魔館の門番、紅美鈴。

その声でチルノは目を覚ました。

「あ、門番！！

今日こそアタイが最強ってことを教えてやるんだから！！

覚悟しなさい！！」

「い、いきなりだな」

「そーなのかー

ところでちくわってなに？」

チルノが足をばたばたさせながら騒いでいるのを横目に、美鈴は紅魔館とは逆の方向から湖に沿って何かが近づいてくるのに気づいた。

「ちょっとまった、チルノ！

あれー、おかしいなぁ、近くに妖怪の気なんかなかったはずなんだけど……

まさかこんなところに人間ってわけでもないだろうし……」

「あー、なんだよ門番！

勝てそうにないからって勝負しないのか？

それならアタイの勝ちってことでいいのか！？」

「ちょっと黙って！

あと私のことは美鈴さんとお呼び！」

チルノの相手をしながらも近づいてくる何かから目は離さない。

何か違和感を感じたからだ。

妖怪にしても人間にしても、それ以外にしても、
必ず『強さ』っていうのはにじみ出てるはずだ。
たとえそれが人里の人間で一度も喧嘩すらしたことがなかったとしても、何らかの『強さ』を察知できるはずだ。
それが、近づいてくる何かからは何も感じない。
それはつまり強さがまったく未知数ということ。
警戒する理由には充分すぎる。
ゆっくりと近づいてくるそれが、次第に人であることが分かった。
距離としてはまだ数キロあるとはいえ、その人間から目を離すわけにはいかない。
美鈴は少しだけ頭の隅で考えてこういった。
「よしそうだ、チルノ！
あそこに見える人影は確か幻想郷一強いはずだ
アイツを倒せばチルノが最強だぞ！」
「ホントかー？
よし、倒してくるわ！」

勢いでチルノをあの人間に向かわせたけど大丈夫だろうか。
基本的に人間は弱い生き物であるとはいえ、幻想郷には霊夢や魔理沙などの例外がいくつかある。
もしかしたら妖精など一瞬で蹴散らすほどの強者かもしれない。
チルノが人間の目の前まで行くとなにやら叫んでいる。
流石に何を言っているのか聞こえないが、おそらく丁寧に自己紹介でもしてるのだろう。

数分後、何故か人間はふわふわと浮くチルノに、服の背中の部分を掴まれて一緒に浮いて美鈴のもとまで来た。
この人間自身に浮くちからはなさそうだ。
「なんかね、この人間、外の世界ってところからきたらしいの
それで最強のアタイに頼りになるやつがいるところまで運んで欲しいって頼まれたの
アタイってば頼りになるわね！」
「……それはつまり、チルノは頼りにされてないってことだよね……まぁいいか……
それであなたは……」

美鈴はチルノに同情の目をやると、その下で吊られている人間に話しかけた。

「え？あ？俺は……えっと……

なんていうか、そう、被害者です！！」

「そーなのかー」

「被害者ですか……なんの被害者かってのは聞いてもいいんですかね？」

「えっと……幻想郷に無理やりつれてこられた被害者です

多分八雲紫のせいで……」

男がそういうと美鈴は目を丸くして

「へぇ、八雲をご存知でしたか

それにしてもよく今まで生きてましたね、みたところただの人間ですよね？」

ただの人間というより、美鈴が感じた正直な直感では、

遠くにいるとき『強さ』が察知できなかったのは、何らかの異常事態だったわけでも、男がそれを隠していたわけでもなく、

単に美鈴が察知できないほどの『強さ』しか持ち合わせていなかっ

たというだけなのだ。

「あ、それは、たった今ここにきたばかりなので」

「たったいま？

でもさっき八雲のことや、この世界が幻想郷という呼称であることを知っているようでしたが……」

「あぁ、それは……」

説明しようとしたが、男は口をあけたままで考えた。

……説明するには長くなりすぎる……っていうか信憑性もない。

外の世界では知っている人間も多いなんて。

相手が八雲紫ならまだしも、一妖怪の美鈴では伝わらないだろう、と。

そこで

「いろいろあるんですよ」

と笑顔で答えた。

「ずいぶんアバウトですね……

では、立ち話もなんですし紅魔館へいらっしゃいませんか？

あまりちからのある方でもないようですし、館の誰も入ることを拒まないと思います

ところでお名前は？

あ、私は紅美鈴といいます」

「……」

美鈴たちが外から来た男と接触する数分前。

迷いの竹林では、竹林の住人妹紅と因幡のてゐが、

手ごろな石に腰掛けて話をしていた。

「いや、だからほら、そこはおまえが悪いって」

「なんでウサ？

鈴仙だって一緒にいたのにお師匠に怒られなかったのは不平等ウサ」

「おいおい……その師匠の部屋からかってに薬持ち出したのはおまえだろう……

鈴仙はむしろ被害者じゃないか……？」

少し前にアリス絡みの厄介事に巻き込まれたときから、妹紅とてゐは二人で会うようになっていた。

仲がいいわけではないが、二人とも本来の生き物の寿命をはるかに超えて長生きしすぎた身だ。

暇を潰す相手がいればこうなるのは当然だろう。

「う、……そう考えればそうだけど……」

「そもそもなんの薬を持ち出したんだ？」

「惚れ薬」

「惚れ薬！？

またベタなモノを……

何に使うつもりだったんだよ……」

「ちょっと魔法の森の魔法使いに頼まれてね……

師匠に無断で持ち出させてもらったウサ」

「魔法使いねぇ……」

「せっかく薬の代金は私が独り占めできると思ったのに、まさかお師匠に見つかるなんて間抜けをするとは……」

「だいたいその薬効果あるのか？

惚れ薬なんてあやしいモノ……」

「ん、わかんないウサ

お師匠は自己暗示の道具だって言ってたウサ」

「……つまり自分に使うってわけだな……

ホント意味ないもの欲しがるやつもいるもんだな」

「世の中そんなもんウサ」

ふと妹紅は空を仰いで、竹の隙間から僅かに漏れる日光に目を細めて、

「あー、そろそろ時間かな」

「なに、なにか用事があるウサ？」

「あぁ、たいしたことじゃないが用事といえば用事だ？」

「ふーん、残念ウサ、

今日は姫様と殺し合いしないようで」

「それはまた一ヵ月後だ。

昨日やったばっかだしな」

妹紅はそういって切り上げると、何か荷物を持つでもなく竹林から出た。

三話　被害者二号（後書き）

三回目です、今日はもうこれ以上頑張れません……

次回から更新は暇ができたときと、週に最低一回、土曜に更新したいと思います。

書き忘れてましたが、幻想入りした主人公を含め何人かのオリキャラが登場します。

気になる点があれば、気軽に指摘してください。

感想などお待ちしてます。

っていってもまだ序章だけど（笑

四話　発見

魔法の森の入り口、香霖堂。

外の世界から幻想郷に誤って入ってきたものや人々に忘れられて幻想入りしたものを、

分別なく売りに出す雑貨屋。

店というよりは倉庫に近い外見で、実際魔法の森の入り口にあるということで人間も妖怪もあまり寄ってこない。

それでも物好きはいるもので、常連客として通う者が幾人かいる。

カランカランと店のドアが開く音がする。

「やぁ、いらっしゃい」

いつものようにレジで雑誌を広げて読んでいた霖之助は客だと分かると、すぐに足元に雑誌を投げ捨て接客用の笑顔で出迎えた。

「相変わらず暇そうね、霖之助さん」

店に入ってきたのは輝夜と、その連れの鈴仙だ。

「きみのおかげで今から忙しくなりそうだけどね

今日はいつものお連れさんではないようですが」

「あぁ、永琳はちょっとうるさそうだったから永遠亭においてきたわ」

「お気の毒に……

それで……今日は何をお探しで？」

輝夜は、あぁそうだったわねと言ってなにやら嬉しそうに

「外の世界から面白いものが入ってると聞いて」

「誰から聞いたのやら……

でも、確かに面白そうなものはたくさん入ったよ

つい一週間くらい前からかな、急にいろんなものが幻想入りしだしたんだ

中には幻想入りでないものもありそうだけどね」

「そう、まぁいいわ

外の世界の新聞はあるかしら」

「こりゃまた随分とおかしなものを……

どこでそれが面白いなんて聞いたんだい？」

「うふふ、

ちょっと虫の知らせでね
それで、あるのかしら？」
「あぁ、あったよ、確か
それこそ一週間前から昨日の分まで全部ね
ほら、これがそうだ」
そう言って霖之助はカウンターのしたから少し汚れた新聞の束を出して机に置いた。
「ぼくも一通り読ませてもらったけどね
外の世界の事情なんか読んだってさっぱりわからない
分かったとしても幻想郷じゃあ何も役に立ったりしないさ
同じ記事が六日全部に載ってたのは気になるけどね
ほら、その超能力がなんとかってやつだ」
椅子に座って新聞を読み始めた輝夜はすぐに霖之助のいう気になる記事を見つけた。
なるほど、六日間全部に載っている。
見出しは違うけど、内容は同じようなことばっかり。

どれも超能力で高層ビルが消し飛んだとか家が粉々にされただとか、
妖怪たちが暮らすこの幻想郷でさえも起こりえないような怪奇現象
が書いてある。

「外の人間もいまだ、超能力だとか幽霊だとかを信じてるってこと
が分かるくらいさ

さっきも言ったように、それが分かったからと言って
幻想郷に住むぼくたちにはなんの得もないけどね」

「ふぅん、これがそうかぁ

面白そうね、意気地なしの吸血鬼もたまには暇つぶしくらいには役
に立つのね」

「……？

なんのことだい？」

「一週間前の吸血鬼の予言

『近いうちにとんでもないことがこの幻想郷で起こる

外の世界で起こった異変が尾を引いてこっちにやってくるんだ

少なくとも幻想郷の誰の手にも負えないような異変がね』

ですって

あの吸血鬼が本当に未来を予知する能力があるなら
おそらくこのことを言い当てたんでしょう
この記事に載っている超現象のことを
それでこの超幻想が幻想郷にやってくるってことね」
霖之助は驚いた顔をして永遠亭の二人を見た。
「随分とまた物騒な……
ぼくは紅魔の当主のでまかせだと信じたいね」
「あら、それはないわ
何らかの異変が幻想郷にやってくるっていうのは間違いないんじゃないかしら」
「なんでだい？」
「だって、この新聞がここにあることが既に変じゃない？
幻想入りっていうのは、外の世界で誰からも忘れたものが幻想郷に入るってことでしょう？
たった一週間前までの新聞がそろって幻想入りするなんておかしいじゃない

なにかが起こっている証拠よ
それが誰かの意図なのか、たまたま偶然なのかは分からないけどね
……」
「面白そうな話だね
お茶でも飲んでもう少し話さないかい」
そう言って霖之助は部屋の奥に向かった。
「あら、気が利くわね
緑茶でお願いするわ」

魔理沙たちが大図書館に到着した同時刻。
紅魔館のバルコニーで、レミリアは紅茶を飲んでいた。
一人バルコニーにいるレミリアは、広い庭を見渡していた。
バルコニーからは門も見通せるので、美鈴が仕事をサボって湖のほ

うに行ったのは分かっていた。

叱ってもきかないのは今までの経験で分かりきっていたことなので、ほうっておくことにしたのだ。

紅魔館の内部から轟音が響いた。

数刻前に魔法の森のほうから聞こえた轟音とはまた別の感じ。

「はぁー、またフランドールね……」

レミリアは溜息をついて飲みかけの紅茶のカップを机において館内に入っていった。

四話　発見（後書き）

土曜日の定期更新以外にも、今回みたいに、暇があれば書いて更新します。

土曜には書き溜めてる量を考えて、ペースが良かったら、2，3話まとめて投稿するかもしれません。

あと三話ほどで本題に入れそうです。

感想などあればお願いします。

五話　相似

フランドールが起こしたと思われる轟音は大図書館まで響いていた。

「ちょ、ちょっと何よ今の音！？」

「落ち着いてアリス、多分妹様だから……

ここのところ多いのよ」

図書館で座っている四人のうちパチュリーだけがまったく気にもしない様子だった。

「落ち着いてって……あのまま放っておいたら館崩壊するんじゃないの？」

そう言う霊夢に付け加えて、魔理沙は笑いをこらえるようにアリスの家みたいになと言った。

「とにかく気にすることじゃないわ

それより藤原妹紅はまだかしら？

もう約束の時間は過ぎたのだけど……」

「なんだ、パチュリー、あの竹林の蓬莱人と知り合いだったのか？」

と魔理沙。

「そうじゃないわ、里の上白沢に紹介してもらったの
レミィが外を出るのにいちいち日傘を差すのが面倒だっていうからね
耐性がつくような魔法を探してみたの
その魔法の実験に強い熱が必要だからっていったら、藤原妹紅が暇
をしてると言われたの
ていうか何で魔理沙がいるのよ……」
「暇してる……ねぇ」
「そんなことよりパチュリー、私の話を聞きなさい！
犯人探しを手伝って！
魔理沙、あなたもよ！！
前回は魔理沙のせいで私の家がなくなったんだから！」
「そ、そんな昔のこと覚えてないぜ！」
「嘘！
とにかく犯人は幻想郷のどこかにいるんだから見つけ出すのよ！」
「幻想郷のどこかって……要するにこの世界のどこかってことじゃ
ないか……

詮索範囲が広すぎるだろ……」

「まだ妹紅は来てないようだし、私はフランドールの相手をしてくるわ

あんまり暴れられて私のティースポットが台無しにされてもたまらないし」

霊夢は三人を残して図書館を出て行った。

霊夢が出て行くと数秒後に今度は金属同士をこすり合わせたような耳障りな音が響いた。

「ちょっと何やってんのあの紅白巫女！」

アリスはますます不機嫌になりながらも図書館から出るつもりはないようだ。

「ま、私たちは霊夢が帰ってくるまでゆくっりしとこーぜ」

いいながら机のお茶を飲もうとした魔理沙を止めて、パチュリーは

「それ、あなたの分のお茶じゃないから

この館は客にしかお茶を出さないのよ」

「……」

事実、咲夜が置いていった四つのカップは、

その場にいたパチュリーとアリス、それからこれから訪問してくる予定の霊夢と妹紅の分であった。

紅魔館一階の廊下。

館で一番長く広い廊下であり、地下の大図書館やフランドールの部屋への道はこの廊下からつながっている。

そこではフランドールと妹紅が争っていた。

「あ、あぶねぇな！

いきなり何すんだ！？

ていうかおまえ誰だ！？」

「あは、しってるよ

あなた竹林の蓬莱人でしょ？

お姉様がいってたわ

殺しても死なないって！！」
「なるほど、吸血鬼の妹か
悪いけど私は急いでいるんだ」
「私と遊びましょ！」
走ってそのまま廊下を突っ切ろうとする妹紅をフランドールはふわふわと飛んで追いかけた。
紅魔館の廊下の天井は高い。
吸血鬼が飛んで移動しても窮屈を感じないくらいに。
「あはは、待ってよ
きゅっとして……」
フランドールがそういって右手に拳をつくると、
その瞬間、妹紅の左腕が吹っ飛んだ。
肘から先が床に音を立てて落ちた。
妹紅は流石に振り返ってフランドールをにらみつけた。
「くそっ、なんてやつだ！！
不老不死っていったって、痛いもんは痛いんだ！

いきなり腕を吹っ飛ばすなんて……」

妹紅は右手で髪の毛に結んである札を一枚取って、フランドールに向かって構えた。

「何度もいうけど相手をしている暇はないんだ」

フランドールは笑みを浮かべて、再び拳をつくった。

「きゅっとして……」

すると妹紅が右手に持って構えていた札が、ヂッっと音を立てて燃える様に消えていった。

「え……？

もしかして御札効かない……？」

妹紅が髪の毛やズボンに貼っているお札は、妖怪の能力を一時的に封じる力がある。

それを利用してさっさと大図書館に行こうとした妹紅だったが、フランドールの強力すぎる能力の前では意味をなさなかった。

「ちっ、

火事になるとちょっとあれだから使わないでおきたかったけどこれじゃあ仕方ないよな！！

正当防衛だ！

小火が出ても許してくれよ！！吸血鬼！！」

叫び終わると、妹紅の全身がオレンジ色の炎に包まれた。

フランドールはまったく動揺せず好奇の目をして再び拳をつくった。

「きゅっとして……」

レミリアはバルコニーから、フランドールが暴れている一階の大廊下へ向かって二階の廊下にいた。

いつものことなので急ぐこともないかと歩いていると急に庭側の壁が音を立てて崩れ落ちた。

「な、何！？

れ、霊夢？」

壁を壊して大廊下に入ってきた人影は博麗霊夢と同じ容姿をしていた。

違うのは幻想郷ではあまり見かけない服装だということだけ。

「何その服？

……ダサいわよ」

「失礼ね、初対面の人にダサいなんていわれる筋合いないわ！！」

博麗霊夢の姿をしてジーパンにTシャツという格好をした人間は

「そんなことより丁度いいとこで人とあったわ

あなたここがどこか知らない？

私は自分の家に帰りたいのだけど」

といたって真面目な顔で言った。

五話　相似（後書き）

東方キャラの中で妹紅は結構好きなキャラです。
なので物語の主要ではありませんが、ところどころ登場させたいと思います。妹紅かっこいいですよね！

五話目にしていまだ主人公が、主人公らしくありませんが、本編に入ればちゃんと出番は増える予定です。

感想などあればお願いします。

六話　衝突

香霖堂で話をしている霖之助と輝夜の二人。

「――――ふーん、

とりあえずこの新聞はもらっていくわ」

「それはありがたいね、最近さっぱり物が売れなくて困ってたんだ」

輝夜は新聞の一面に載っている写真を見つめている。

『超人！高層ビルを一掃！？』という見出しの記事についている写真には、

右腕を前方に伸ばしてビルを吹き飛ばす人間の横顔が写っていた。

「異変はそのうち幻想郷を訪れる……

……それはいいのだけど、

……この写真、っていうかこの人間……

どう見ても博麗の巫女にしか見えないのよねぇ」

紅魔館二階の廊下で、霊夢と同じ顔をした人間はレミリアに尋ねた。

「ねぇ、ここはどこかしら？」

「な、なに言ってんのよ霊夢？

ここは紅魔館よ！？

私は当主のレミリア！」

「……誰よ霊夢って……」

他人と間違えられたからか、人間は不機嫌そうな顔をして右腕を前方に伸ばして

「まぁいいや

消えてくれるかしら」

耳障りな金属音が響いたかと思うと、レミリアの立っているすぐ横の床に穴が開いた。

まるで直径1メートルくらいの弾丸が貫通したような穴がぽっかりと開いた。

「な……」

いくら博麗の巫女とはいえ、詠唱もなにもなしでこんな威力の技が出せるわけがない。

妖怪で最強クラスの種族といわれる吸血鬼だってこんなことできない。

レミリアは本能で恐怖を感じた。

「なんてことすんのいきなり！！」

「あー、外れちゃったか

……次は外さない」

「……！！」

大図書館をでた霊夢はフランドールのもとへ向かえば戦闘は避けられないと思い、

ホールで結界や御札仕組んで体制を整えていた。

ここにくるついでに食料庫から無断で持ってきたコーヒーに入れる角砂糖を大量に食べながら。

「おかしいわねぇ、なんで音が二箇所からするのかしら……

まさかフランドール分裂してるんじゃ……」

ブツブツと独り言を呟きながら仕込みをする霊夢の背のほうで扉が開いた。

霊夢は現状を思い出しすぐに後ろを振り向いた。

フランドールがここまでやってきたのかもしれない。

「あ、来てたんですね、霊夢さん」

霊夢が紅魔館に入るときに何故か門にいなかった美鈴だった。

それにチルノとルーミアまでいて、もう一人見覚えのないさえない少年。

少年というべきか青年というべきか、迷う外見だが。

「なんだ美鈴か……驚かせないでよね

ていうかあんたどこにいたのよ?

門番が門にいないと意味ないじゃない」

「あはは、いろいろありまして……」

「ところで……
チルノとルーミアは置いといて……
……あんた誰？」
と、霊夢は角砂糖を三つほど指で挟んだ手で唯一知らない人間を指差した。
「あぁ、この人は外の世界から来たらしいんです
外来人っていうんですか？
こっちにくるときに多分負荷がかかって、記憶がとんじゃって自分の名前も分からないようでして……」
「記憶喪失？」
「みたいなものですね」
終始笑顔で受け答えする美鈴は霊夢の座る目の前の小皿に１０センチばかりの角砂糖の山を見て呆れたような口調で
「甘いものをとりすぎると体に良くないですよ
特に人間はデリケートなんですから……」
「なによ、この角砂糖は私のものよ、あげないからね」

「あ、あの……つれてきてもらったのは嬉しいんですが、俺はこれからどうすれば」

人間は困ったように美鈴に尋ねた。

「あ、えー、多分ここで待ってれば何とかなります

私はお嬢様を呼んできますんで、そこの暇そうな霊夢さんとお話でもしててください」

そういうと美鈴は開けっ放しにしていたドアから出て行った。

「あ、ちょ……

別に暇じゃないんだけどねぇ……

まぁとりあえず座りなさいよ、ほら」

霊夢は自分の隣の椅子を引いて誘った。

「は、はい」

「チルノとルーミアはどうするの？

ていうかあんたたち何しに来たの……？」

「その人間についてきただけだよ」

「アタイにも四角いの頂戴よ！」

ルーミアは霊夢の向かいの席に何故か正座して座り、チルノは霊夢の椅子の背につかまってぶら下がりだした。

「あー、勝手に食べればいいから！

もともと私のじゃないし

で……あんた……えっと、名前もないんじゃ呼びにくいわね」

霊夢はなにか考えるそぶりも見せず

「じゃああんたは今から博麗２号ね」

「えぇ！？

なんですか、急に！？

そんな適当な……」

「なによ、博麗の名に不満があるの？」

「なんで博麗……」

「あー、ほらあんた、この世界に来たのはいいけど、いくとこないでしょ？

だったらうちに来なさいよ

雑用押し付けるかわりに住むところは提供するわ

仕事と住むところが一気に決まってラッキーじゃ――――」

霊夢が勝手にべらべらと喋っていると天井からミシミシと軋むような音がした。

次の瞬間派手な音を立てて天井が崩れ落ちた。

それと同時に二つの人影がホールに下りてきた。

いや、片方は落ちてきたという感じだが。

一人はドテっと不恰好に頭から床に叩きつけられ、もう一人は軽快に机に着地した。

机の上に立つ人間を見て霊夢はさっきの自分勝手な独り言に付け加えた。

「あぁー、ごめん、やっぱりあんたは博麗3号で……

こいつが2号だわ……」

天井からホールに入ってきたのは霊夢と同じ容姿をした人間とレミリアだった。

レミリアは床で頭を抑えてもがいていた。

七話　攻撃

「よ、よし、それならじゃんけんだ！
じゃんけんで決めよう！！」
「なんでよ？
魔理沙は招かれてもないし、歓迎されてもないんだから
あなたが一番適任でしょう」
「適任ってあのなぁ、私だって客だ！
この館は客に雑務を押し付けるのか、パチュリー？」
「アリスがただしいわ
魔理沙、客だと言い張るんならまず門から入ってきて頂戴」
「な……！！
わ、私はなんといわれても行かないぜ！」
図書館の三人は霊夢が向かったにもかかわらず未だ音が止まないので、
誰が様子を見に行くのか争っていた。

「……じゃあ私が行くわ」
「パチュリー！？」
「どうせあんたたちじゃんけんしたって文句言うでしょ
私がいったほうが早いわ
魔理沙はおじけづいて行きたくないようだし……」
「だ、誰がびびってるって？」
「あら、そんなこと言ってないわ
おじけづいてるって言っただけよ？」
「一緒だそんなもん！
そんなに言うなら私が行ってやるよ！」
魔理沙は机に置いていたほうきと黒帽子を持って図書館を出ていった。
「悪いけどアリス、私も行ってくるわ
魔理沙だけじゃあなにをするか分からないもの」
「え、ちょっと待ってよ、それなら私も行くわ」
「そう、それは助かるわ

今暴れてるのが妹様だとしたら……」

まずいかもしれないわねといって早足に図書館を出た。

「ちょ、待ってパチュリー！」

輝夜と鈴仙は香霖堂からを出て永遠亭へ帰るのに竹林を歩いていた。

「おかしいのよね……

六日それぞれに起こった事件は全部共通して現実離れしてるけど、

昨日の記事だけが……

どう思う、因幡？」

「わ、私には分かりません

昨日の記事がどこか他の記事と違うんですか？

私には全部一連の事件としか……」

「二日前までの事件は家が一軒全壊か、せいぜいビルが半壊程度
それが昨日の事件だけは明らかに規模が違うじゃない……
山一つなくなったですって？
そんなことあるわけないじゃない、って言いたいくらいよ
でもこの記事が本当だとするなら……」
「ま、まさか、どこぞの天狗みたいに記者のでっちあげですよ」
「これは全部同じ犯人なのかしら……
……それとも……」

紅魔館一階大廊下。
妹紅は全身に火をまとい臨戦態勢に入っていた。
フランドールは何食わぬ顔で

「きゅっとして……

……どかーん！」

また破壊する能力を使ってくる。

そう思って身構えた妹紅だったがどうやら違った。

フランドールが叫んだかと思うと四つに分裂した。

体が丁度４等分されてそれぞれがフランドールの形になった。

「な……

無理だ無理、なんだそれは！？」

瞬時に妹紅は背を向けて走りだした。

いくら不老不死とはいえ痛みや死に対する恐怖は、普通の人間と変わらない。

このまま戦っては確実に何度か死ぬだろうと直感した。

「あははー、待ってよ

せっかく四人になったのに

あ、もしかして鬼ごっこ？」

「やってられるか！
ただでさえ危険なのに四人なんて相手にできるわけないだろ！
吸血鬼には申し訳ないけど……」
妹紅は一度立ち止まって全身の炎で廊下の壁、床、天井に火をつけた。
上下左右を火で囲んで炎の壁を作った。
「は、これで時間は稼げるだろ！
じゃあな！」
と再び走りだそうと背を向けた妹紅だったが、何か妙な勘がはたらいてすぐに振り返る。
「きゅっとして……」
フランドールは自身の能力を使って、炎の壁を破壊してきた。
「ま、まじかよ……
炎に穴あけるなんて……」

一階のホールでは天井から入り込んできたレミリアと人間が言い争いをしていた。

「な、なにすんのよ霊夢！！」

「だから誰よ霊夢って……

人違いもいい加減にしないと本当に消すわよ？」

「何よ！

私のこと忘れたっていうの！？

あと何度も言うけどその服ダサいわ！」

と、言ったところでレミリアはホールに自分たち以外にも何人かがいることに気づいて、周りを見渡した。

「だいたい……って……えぇ！？

こっちにも霊夢！？

いや、でもこっちの霊夢はちょっと貧乏くさいわ……」

「……おい

まぁいいわ、レミリア、あれはなんなの？
なんで私と同じ顔してるのよ？」
「あぁ、よかった、あなたは急に襲ってきたりしないのね！」
「……まぁ本物だしね」
「本物！？
じ……じゃああの霊夢は……」
「どう見ても偽者よ……
ていうか私あんな服持ってないし……」
霊夢は面倒だと言わんばかりに、ようやく立ち上がって構えた。
「そこの偽者！
いや、２号！！
何しにきたか知らないけどね、私は今忙しいの、急いでるの
怪我したくなかったらさっさと帰りなさい！！」
「偽者……？
それはあんたでしょうが！！

本物は私！」

霊夢は十分に相手が攻撃を仕掛けてきてもかわす準備をしていたし、それなりに距離もあったのだが、

偽霊夢が走りこんできて上段蹴りをしてきたのをまともに受けてしまった。

「はやっ！！」

頭部にまともに打撃を受けてめまいがする。

何とか持ちこたえて相手を見据える霊夢だったが最早まともに戦いことはできそうになかった。

「はっ！！

たいしたことないのね！

私の偽者のくせに！」

偽霊夢は勝ち誇りながらバックステップでもとの場所まで戻ろうとした。

レミリアはすかさず移動してくる偽霊夢にタイミングを合わせて背後から切り裂こうとした。

いける、あの偽霊夢はいま油断している。

と思ったレミリアだったが、偽霊夢はレミリアの斬撃にあわせて高くジャンプし、難なくかわした。

「抜け目ないわね……

ま、たいした攻撃じゃなかったから簡単にかわせたけど」

「な、なんてやつよ！？

後ろも見ないで……」

ドン、と今度は地鳴りを伴って轟音が響いた。

「え、何！？」

その場にいた全員が驚いた様子だった。

「ちょっと危なそうね……

ここにいても得るものはないだろうし……」

そう言って偽霊夢は落ちてきた天井の穴に戻って姿を消した。

八話　訪問

霊夢に2号と命名された偽霊夢は二階の壁をぶち破って館の外へ出た。

偽霊夢が外へ出たのと同時に妖夢が紅魔館の正門を訪れた。

妖夢が尋ねてきたのはまったくの偶然。

何か悪い気配を察知したからでも、幽々子や紫の命があったわけでもない。

ただ少しの間暇を出された妖夢が、紅魔館くらいしか行くあてがなかっただけなのだ。

「まったく……幽々様の気紛れで暇を出されても困りますよ……」

妖夢はいつも番をしているはずの美鈴がいないことに気づいて立ち止まった。

異常事態？

それともいつものサボり？

考えるまでもなかった。

妖夢は美鈴が門番をしていないことが日常茶飯事ということを認識していた。

これはいつもの風景。

番のいない門が普通。

ただ妖夢の考えは間違ってはいなかった。

紅魔館での騒ぎは偽霊夢とフランドールによるものであり、

美鈴が連れてきた外来人は関係していない。

この時点では、妖夢がいま紅魔館で起きていることを察知することはできなかった。

妖夢は正門から入るとまっすぐ正面の入り口に向かって歩いた。

このまま行けば偽霊夢が律儀に正門から出ようとしない限り二人は接触したりしない。

妖夢は玄関のベルを鳴らして返事が来るのを待った。

頭部の痛みも和らいできた霊夢は再び山盛りの角砂糖を食べ始めた。

チルノとルーミアは霊夢のまねをして、すぐ横で角砂糖をピラミッドの形に積み上げている。

意外にも平気そうな霊夢を見てレミリアは

「……なによ霊夢……なんともないの？」

「見ての通りよ

なんともないわ、角砂糖のおかげで頭も調子がいいわ」

「……そうじゃないでしょ！

あなた……本気で言ってるの！？

博麗霊夢と同じ外見をした人間が現れた……！

見たこともない服を着て、まるで無感情……！

それも本物以上の力を持っている……！！

これは異変……少なくとも異常事態よ！！

こんなところで角砂糖を積んでる場合！？」

「……まーあわてることじゃないわよ」

「随分と落ち着いてるのね」

「……あれは私の手には負えない

レミリア、あなたが圧倒されてたことからもそんなこと分かるでしょ

博麗霊夢では敵わない相手……

……偽者かどうかは別として今は相手にすべきじゃあないわ」

霊夢の冷めた態度にレミリアは沈黙した。

なぜ焦らないの？

自分と同じ顔をした人間が現れた。

あの性格ではなにをしでかすか分からない。

自分の知らないところで、悪いうわさが立つかもしれない。

偽者が起こした事件によって。

チラッと霊夢を見てもやはり無関心。

なんともないような顔をして、角砂糖の山から一つずつつまんで口へ運ぶ。

まだ偽霊夢が部屋を出てから一分も経ってない。

今から追えば間に合うかもしれない。

何とかなるかもしれない。

「霊夢――――」

レミリアが呼びかけようとしたとき、

ドカン、という音が響き、レミリアはすぐにそれが偽霊夢が原因であると察知した。

「なによ？」

「……なんでもないわ」

偽霊夢は館の外。

さっきの音は壁が崩れる音。

……

「霊夢……一ついいかしら？」

「なによさっきから、言っとくけど今から追いかけたりしないからね

どうせ勝てないし」

「追いかけるとは言わないわ

……さっきの人間が霊夢と同じ姿をしていたなら、霊夢と同じ能力っていうことはありえると思う？」

レミリアは、もう偽霊夢を追うことは無理だと悟り、また別のことを考えることにした。

これは異変か否か。

「『主に空を飛ぶ程度の能力』ね……

ありえるんじゃないの？」

「そうね、侵入してきたのが二階からだったから空を飛べるというのは間違いないわ」

「主にっていっても、あとは特にないわよ？

空を飛べるということがほとんど

あとは巫女としての力くらいよ

まぁ御札とか、物の力に頼ってるところが大きいけどね」

「……霊夢、あなたは素手でこの紅魔館の壁を壊せる？」

「……なに、あいつ素手で壊したの？」

「媒体を用いずに弾幕を撃てる？」

「私は御札しか使わないわ」

「あいつはできたわ、軽々と」

「……なるほど少なくともただの人間ではなさそうね……

……それで？」

「それでって……

私が言いたいのはこういうこと！

あれは人外！

霊夢より強い基礎能力と特殊能力を持ってる！！

やっぱりこのまま放っておくのは危険だわ！！」

真剣に話すレミリアから視線をはずして角砂糖の山を見つめながら

霊夢は

「……私より強い能力ってなによ？

たとえば？」

「『ありとあらゆるものを壊せる程度の能力』」

「……それはフランドールの能力でしょ」

「たとえばよ

あとは———」

「『境界を操る程度の能力』……とか？」

レミリアは不意に後ろから声がしてすぐに振り向いた。

いつの間にか紫が椅子の上に立っていた。

「紫！！

ていうかなんで椅子に立ってんの？」

「そういう気分なのよ」

レミリアの問いに扇子を口元に寄せ不気味な笑いを浮かべながら返事をする紫。

霊夢は角砂糖から目を離して

「紫！！

……あんたいつから……

今更何しに出てきたのよ！！」

「あら、随分ご機嫌ななめね

そうね……話をしたいんだけど、そこの人間さんちょっと御退室願えるかしら」

レミリアと偽霊夢が天井から降ってきてからずっと呆然としていた外来人は急に言われて驚いたようで

「え！？あ…え……はい！

えっと分かりました…部屋の外へ……あ……はい」
といって外へ出た。
「……そこの二匹はいいの？」
「あぁ、いいのよ霊夢
外の人間には聞かれたくないだけだから
この子たちは問題ないわ」
「それで……話って？」
「そうね、単刀直入に言うわ
さっきの霊夢に似たあのこ、館に入ったあたりから見させてもらってたけど
どうも危ないわね
さっきあなたたちがしてた、なんの能力かって話
知りたいでしょ？
彼女がどういう能力を持ってるか」
「勿体つけないで早く言いなさい！」
「……せっかちね……

まあいいわ、彼女の能力だいたい予想はついてたと思うけど

おそらくあなたたちが考えていた以上の能力

『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』？

違うわ

そんなに限定的な能力じゃない

……『なんでもできる程度の能力』

……それが彼女の能力よ」

八話　訪問（後書き）

初の定期更新です。
登場するキャラが紅魔郷から永夜抄に偏ってるのは、作者がそのへんしかプレイしたことがないからです。
申し訳ない。

九話　暴力

「『なんでもできる程度の能力』
それが彼女の能力よ
もっとも、彼女自身はそれには気づいてないでしょうけどね
ただちょっと自分はできる人間だと思っているだけ
ちょっと本気を出せばなんでもできてしまう天才
その程度にしか思ってないわ
この世で何者にも勝る力を持ちながらね」
紫が言うには、『なんでもできる程度の能力』は文字通りなんでもできる、
つまり不可能がない。
だが思ったこと全てが可能と言うわけでもない。
たとえば、海の上を走ることはできない。
壁を走ることはできない。
これは能力者が不可能だと思い込んでいるからだ。

確かに不可能。

実際にはありえない。

そういうことはできない能力。

つまり『なんでもできる程度の能力』では、

できることはできて、できないことはできない。

能力者自身が「できるはずない」と認識している常識とはあまりにもかけ離れたことはできない。

だが逆に「できるかもしれない」「起こりうるかもしれない」ということは、必ずできる。

ある研究者は、ある事象が億分の一でも起こりうる可能性があるなら、その事象は必ず起こる、と言った。

これこそが『なんでもできる程度の能力』の全て。

起こりうる可能性を強制的に起こす。

サイコロの目が１００回連続で一になることなど、ないに等しいが、

彼女の能力は、それを引き起こす。

彼女の意思があれば、１００回連続どころか、１０００回だろうと

１万回だろうと、一の目は出続ける。

もっとも、サイコロを振るさい、彼女が「流石にもう一の目はでないだろう」と考えてしまえば、二の目か三の目か、
一以外のほかの目が出ることになるが。

「……『なんでもできる程度の能力』……ねぇ」
「いやそれはないでしょ、どんな反則技よ」
黙って紫の話を聞いていたレミリアと霊夢は、まるで信じないといった様に呟いた。
「だいたい本当になんでもできるんだったら、2号がその気になれば、私たちは操られておしまいでしょ？」
「それは心配ないわ
なんでもできると言っても、意思のある物体には基本的には作用しない能力だから
その点で言えばフランドールの『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』の方が上かしらね」
「でもそれって結局、思いついたことがなんでもできる
なんでもありな能力でしょ

そんなのどうやって勝つのよ」

「そうねぇ……たとえば……

相手が考えきる前に首をスパ……っとか？」

紫は扇子で自分の首をはねるジェスチャーをしながら笑みを浮かべた。

一階の大廊下へ出た魔理沙、アリス、パチュリーの三人は、すぐに非常事態であることを察した。

図書館の出入り口から少し離れたところで４つの影が浮いている。

「フランドール！！」

魔理沙の叫ぶ声が聞こえてか、フランドールはこちらを向き三人に気づいた。

「あ、魔理沙

それにパチュリー

あのね、今ここに不審者がいたの
館の外に逃げられちゃったんだけどね
殺してもしなない人間」
「……フランそれは違うわ
私が招待したのよ
……不審者じゃなくて客」
フランドールはふわふわと浮いたまま近づいてきて、パチュリーに尋ねた。
「殺しちゃ駄目な人間だった？」
「そうよ、駄目
それとフォーオブアカインド解いたら？
それ魔力の消費も激しいでしょ」

紅魔館の正面玄関のそばの窓が割れ、妹紅が飛び出してきた。
「なんつーとこだ、ここは
図書館に行くまでに何回死ねばいいんだ、私わ」
ふと妹紅が周りを見渡すと塀を越えようとする人影が目に入った。
門以外からの脱出、不法侵入者？
不法も何も、幻想郷には法律なんてないようなものだが。
「おーい、そこの……」
妹紅が声をかけるとその人影は振り向き、それが霊夢だと分かった。
さっき館から脱出した偽霊夢。
だが妹紅にはそれが偽者であることは分からない。
「ああ、なんだ神社の巫女か
なにしてんだ？
こんなとこで
……今日はまた一段と変な服だな」

玄関の前に立っていた妖夢はガラスの割れる音が聞こえて妹紅のほうへ走ってきた。

同時に偽霊夢はゆっくりと妹紅のほうへ近づき地面に降りた。

「丁度いいわ、無駄だと思うけど一応聞いてあげるわ

ここはどこかしら？」

「……紅魔館だ」

走ってきた妖夢は二人に話しかけた。

「こんにちは、妹紅さん、霊夢さん

お二人してこんなところでなにかあったんですか？」

近づくと妹紅が片腕がないことに気づき、心配そうに尋ねた。

「うあ……大丈夫ですか？

その腕……」

「大丈夫だ、なんともない」

「……そうは見えませんけどね」

言い終わって妖夢は、自分が『霊夢』と呼んだ人間から睨みつけられていることに気づいた。

「な……なんでしょうか？」

偽霊夢は大きく溜息をつきゆっくりと聞いた。

「さっきからレイムレイムって呼ばれるんだけど、誰、レイムって？」

突然なにを言い出すのかと、妹紅と妖夢は唖然とした。

「あー、なんだ……

霊夢はお前だろ……？

違うのか？

いや、違わないだろ」

「そうですよ、霊夢さん

何言ってんですか」

偽霊夢は、服装から見ても外からやってきた人間だ。

実際、今館内にいる青年と同じ様についさっき幻想郷に来たばかりだ。

青年と同じようにところどころ記憶をなくしている。

主に幻想郷に来る前の自分やその周りの記憶。
自分が誰で、どこでどういう風な暮らしをしていたのか、
そういう記憶をほとんどなくして幻想郷へ来た。
それでも自分の名前が「レイム」でないことは分かる。

「私日本人だし……
レイムってどこの国の人？」
妹紅はふざけているのかと思い、冗談交じりに
「はは、じゃあお前は誰だっていうんだ！！」
すると偽霊夢は全身を強張らせ、声を震わせながら
「それが……
それがわかんないから苦労してるのよ！！」
ふん、という掛け声で妖夢と妹紅の胸倉を掴み投げ飛ばした。

九話　暴力（後書き）

今日二回目の更新です。
公式設定とかは確認してないんで、いろいろ矛盾とかあるかもしれないですが、了承ください。

もこたんが男口調なのは作者の趣味です。
感想などあればお願いします。

十話　忠告

「ちょっといいかしら……」

レミリアは不気味な笑みを浮かべる紫に尋ねた。

「その能力が本当かどうかなんて聞かないわ

でもひとつどうしても腑に落ちないことがあるの」

「……」

「紫……あなた、あの偽者が紅魔館に侵入したあたりから見てたのなら当然知ってるわよね

彼女が弾幕で私に攻撃してきたのを

詠唱もしない、媒体も用いない

なにもないところからあれだけの威力を生み出すことは可能なの！？」

「……さあ……可能なんじゃないの？

『なんでもできる程度の能力』だし」

「ふざけ――――」

いい加減な返事をする紫に怒り、叫ぶレミリアを遮って霊夢は

「あるとすれば……
『空気』……とか？」

「いでッ」
投げられた妹紅は紅魔館の壁に背中から叩きつけられた。
妖夢はうまく空中で受身を取って足で壁をけり、地面に着地した。
「な、なんですか急に」
「うるさいわね……とりあえず邪魔だから……
殺してもいいかしら」
さっきとは違い、言葉にさっきが込められている。
こんなことを言われれば人のいい妖夢でさえ構える。
そしてあることに気づく。

これは霊夢ではない？

「分かりました

あなたがその気なら私も容赦しないだけです！

妹紅さん構えて！」

壁に衝突して頭から地面に叩きつけられ、ふらふらとしている妹紅はどうにも戦えそうにない。

「よ、よし来た、任せろ」

妖夢は腰に提げてある剣の柄に手をかけ、偽霊夢を見据えた。

「……知ってるわ、居合いってやつね」

「そうです

私の使う剣術の中で最速の技」

偽霊夢は妖夢の半径3メートル弱のところまで近づき立ち止まった。

「ここが間合い？

随分狭いのね」

偽霊夢は直感で妖夢の居合いの間合いを測った。

実際偽霊夢が踏み込んだ位置に妖夢の剣は届かない。

偽霊夢は余裕そうな顔をしているが内面では怯えていた。

相手の攻撃は届かない、私の攻撃は届く。

相手もそれはわかっているだろう、なのになぜ微動だにしない……

有利な状況にいるはずの偽霊夢は妖夢の間合いに入った瞬間を想像して恐怖した。

この先一歩でも踏み込めば、脚か胴か腕か首か、少なくともどこか致命的な傷を負う。

自分の攻撃がどれだけ速かろうと、相手はそれを凌ぐ速さで反撃してくる。

そんなイメージが浮かんだ。

「……」

偽霊夢は迷った。

引くべきか、攻めるべきか。

頭の中のイメージでは、どうせめても負ける。

初撃をかわしても、二撃目でおしまい。

致命傷……

「と、とりあえず……遠距離攻撃よね！」

偽霊夢は一歩下がって、レミリアに放った攻撃と同じものを放つ。

直径一メートルの弾幕。

「……！？」

予想以上に強力な攻撃に妖夢は柄に手を置いたまま下がった。

しかし後ろは壁、

妖夢は一か八か剣を抜いて弾幕を斬ろうとした。

できそうもない、おそらく剣をはじかれておしまいだろう。

だが、意外にもあっけなく弾幕は真っ二つになった。

なんだ、見掛け倒しか、弱い、弱すぎる。

得意げに剣を鞘に戻そうとしたとき、正面のやや上方から声が聞こえた。

「隙あり、どっかーん」

偽霊夢が飛び蹴りをしてきた。

避けれない、直撃、大ダメージ……！！

痛みを覚悟した妖夢に、腹部に覚悟した以上の激痛が走る。
妖夢はそのまま壁を貫通し、館内に放り出された。

図書館前の大廊下でパチュリーはフランドールを説得していた。
「今日はもう部屋に戻りなさい
不審者はいないし、フランの相手をできる人もいないわ」
「えー、もっと遊びたいよ
魔理沙一緒にあそぼー」
「い……勘弁してくれよ
私だって忙しい」
それに命は惜しいしな、と小声で付け加えた。
ふいに図書館出入り口の正面の壁がドカンと音を立てて壊れて、妖夢が転がってきた。

壊れた壁のすぐ前には、霊夢と同じ顔をした人間が勝ち誇った笑みをして立っている。

「私の勝ち私の勝ち私の勝ち私の勝ち私の勝ち！！！！！！」

いつもと違う雰囲気と服装の霊夢を見て、魔理沙、アリス、パチュリーは異様に思った。

「な、何してるんだぜ、霊夢？」

「な、何、なに？」

「あー、また面倒なことになりそうね……」

フランドールだけが霊夢の異変に気づかなかった。

「あは、霊夢、遊んでくれるの？」

偽霊夢は苦しそうに立ち上がる妖夢の肩を両手で掴んで思いっきり踏み込むと

「私の勝ちよ、剣術使い！！

ハイヤァァァァァ！！」

といって上方に投げ上げた。

「ダサッ！！

掛け声ダサッ！！
どうしたんだ霊夢、いつも以上にどうかしてるぜ！？」
魔理沙の問いかけに偽霊夢は答えなかった。
壊れた壁から妹紅がほふく前進をしながら入ってきた。
「あは、霊夢、たのしそうね！
私も遊びたいわ」
フランドールは興奮した様子でフォーオブアカインドを更にもう一度。
四体それぞれが四つに分裂し十六体に。
そして十六対それぞれがきゃっきゃと笑いながら四方八方に弾幕を無数に飛ばす。
「ちょっと……！！
待ってフランドール！！」
パチュリーが声をかけても返事などしない。
「なにやってるのあなたたち逃げるのよ！」
「逃げるたってどこに？」

「どこでもいいわよ、とにかくここから離れて！！」

魔理沙は了解したぜと言い、地面に落下してきた妖夢を背負って大廊下を全速力で走った。

アリスとパチュリーも魔理沙のあとに続いて走った。

走りながらパチュリーは

「あと、フランの弾幕には絶対当たらないようにね！

当たっちゃったら最低でもさっきの蓬莱人みたいになるわよ

壊れた壁から入ってきた妹紅、片腕なかったでしょ！！

五体満足のままいたいなら絶対当たっちゃ駄目よ！！」

と二人に言い聞かせた。

十話　忠告（後書き）

こんばんは、土曜の定期更新です。

物語もようやく本筋へ。

そろそろ主人公が目立ってもいい頃だと思います。

十一話　猛進

一階ホールにはレミリアと霊夢だけがいた。

紫は「媒体は空気」という発言に対して、

「……違うわ

いえ、でも……いい線いってるわ」

といい残してスキマを使って帰っていった。

チルノとルーミアは部屋の外で待っているはずの男を呼びに言ったままだ。

「なんでもできる程度の能力……ね」

「なに、レミリア、あなたまさか信じてたの？」

霊夢は鼻で笑いながら言った。

「嘘よ、嘘

あんなもん大嘘

どう考えたってありえないじゃない

……」

少し考えるようなそぶりを見せてから、テーブルの角砂糖を積み上げながら続けた。

「……ありえない以前に

おかしい……不自然……筋が通らないわ……

なんでもできるなら、媒体は必要ない

それこそ『無』という媒体を使えばいいし、そもそも媒体などなしで攻撃すればいい

それとあの蹴り

もし紫が言うように『なんでもできる程度の能力』があるなら

蹴ったものを粉砕、粉々くらいわけない

それがただの脳震盪、私はもう今なんともないわ

意思のある生物に直接は作用しないといってたけど

蹴りの威力くらい強化できるはず

それをしなかったというのは、おそらく間違い

……できなかった

そういう能力じゃないから

……」

少し間をおいて、目線を伏せながら立ち上がって

「だから嘘！

『なんでもできる程度の能力』なんて大嘘！！

根拠がなくたって紫の話なんて信じやしないけどね

ま、あの女が無敵に近い何らかの能力を持ってるってのは確かだけど……」

「紫が言ってたことが嘘か本当かは置いといて、

とにかくあいつは強いわ」

レミリアは考えた。

『なんでもできる程度の能力』……それが嘘……だとしたら？

霊夢の言うとおり、紫は信用できない。

だけど今回に限っては、本当であったほうがしっくりくる。

仮に、彼女がまた別の能力を持っていたとしたら……

どういう能力？

いや、そんなことより、なぜ紫は違うことを教えたのか。

わざわざ紅魔館まで来て。

気紛れ？

いや、おそらく何らかの意図が……

それとも、紫は本当に『なんでもできる程度の能力』だと思い込んでいる？

それなら筋が通る。

紫が思い込んでいるだけで、実は嘘。

それなら霊夢の言い分もただしい。

いや、違う、それはない……！！

紫は彼女の能力に何らかの媒体が必要であることを示唆していた。

「空気」と近い何かが媒体であることを。

霊夢のいうとおり、なんでもできるなら、媒体など必要ない。

必然、紫は嘘つき……！！

わざわざ嘘をつきにこんなところまで来た。

意図……その意図は……？

妖夢を抱えて走る魔理沙に対して、アリス、パチュリーは飛んで移動していた。

大廊下を舞う無数の弾幕。

大廊下は長い、1キロや2キロどころではなく長い。

それを走り続けてたって意味がない。

意味がないどころか突き当りまで行ってしまえばゲームオーバー。

パチュリーは提案した。

「アリス、魔理沙！！

分かれましょう！！

三人ばらばら、それぞれが別の道を行きましょう！！」

「な……

……分かったぜ、私はそこで右に曲がろう」

魔理沙は目の前の十字路を指していった。

「アリスは左、私はまっすぐね！」

「くそ……！！

そんなことしなくても窓から外に出ればはやいのにっ……！！

なのに……

……なんでこの廊下は窓一つないんだぁ！？」

紅魔館の大廊下には窓がない。

吸血鬼の住む館だ、窓はないほうがいい。

一部の部屋とバルコニー以外館内に光の当たるところはない。

つまり外へ出られるのは、その一部の部屋か、玄関裏口のどれかだ。

「よし、じゃあ曲がるぜ！！」

「ええ」

壊れた壁から大廊下へ入った妹紅は、フランドールと対峙していた。
勿論その脇には偽霊夢。
「あは、久しぶりね、蓬莱人さん」
「……そうだな、二分ぶりだ」
分身したフランドールは半数が魔法使いたちを追いかけ半数が残った。
8体……妹紅の目の前にいるフランドールの数……
そしてもう一人得体の知れない女。
外見は霊夢そのもの……だが実際はまるで違う。
これが霊夢なわけがない。
「多いわね……
9匹……」
偽霊夢はフランドールと妹紅を一人ずつ指で指して数えてから呟いた。
「ま、こんなとこにいても得はないわね

こんどこそこんな変な館とはさよならさせてもらうわ」
そう言って壊れた壁から脱出する。
「あ、まて……
……なんだよ、あいつとは戦わないのか？
私なんかよりもよっぽど強いぞ？」
妹紅は偽霊夢が見えなくなるのを確認してからフランドールにたずねた。
「いいのよ、だっていくら強くたって
人間は殺したら死んじゃうでしょ」
「……物騒な子供だ」
「でもあなたは死なないでしょ
腕を？いでも、脚を千切っても、首が落ちても、心臓を握りつぶしても
……死なない、死なない死なない！！！！」
狂気……二度目の対面で妹紅がフランドールに対して感じた印象はそれだ。

狂っている。

いくら妖怪、人外であってもここまで壊すことに固執した者は今まで見たことがない。

こんな目的も何もないところで壊されてはたまらない。

妹紅は来るんじゃなかったと後悔した。

久しぶりに他人に頼られた。

それは嬉しいことだ。

だが、いざ来てみればただの面倒事……どころか命に関わる遊び。

死なないといっても死ぬほど痛い苦しみなんてそうそう味わいたいものじゃない。

やはり、逃げるべきか……

立ち尽くす妹紅を見てフランドールはふと思った。

死なない人間を殺した者は今までいないだろう。

なら、自分が今ここでこの蓬莱人を殺せば……？

史上初、死なない人間を殺した吸血鬼！！

面白い、面白い面白い！！

８体のフランドールは再び各々が分裂を開始した。

十二話　名前

フランドールが暴れだした廊下とは別の廊下にチルノたちはいた。

チルノ、ルーミア、外来人の三人は、紅魔館の外を目指して歩いていた。

館からの脱出。

外来人は名前がない。

今現在自分の名前として覚えている名称がない。

それは良くない。

言葉は力であり、名前は言葉である。

自分で自分の名前を知らないということは、自分の存在を肯定できないということ。

ましてまわりも知らないとなれば、世界に存在を認識されない。

ただの名前が持つ力というのは意外にも大きい。

外来人はそれを理解していた。

占いだとかそういった類のインチキ商売とかではなく、実際に名前は自身の力に影響する。

こういってはなんだが、博麗霊夢が幻想郷のトラブルバスターとして活躍できているのは、

『博麗』の姓のおかげだし、『霊夢』という名のおかげ。

彼女の存在そのもの自体はそんなに大きな力を持たない。

それが『博麗霊夢』という名前を通してこの幻想郷という世界に溶け込んで、この世界において強い力を発揮する。

それくらい……それくらい名前は重要……！

外来人のまず最初の目的は、寝床の確保でも現状の把握でもない！

自分の名前を探すこと。

幻想郷において、自分の存在を肯定しうる、誰もが認める自身の名前を見つけること。

記憶の中にある名前とはまた別。

ここはもとの世界とはまた別の世界なのだから、本来とは違う名前。

つまり、仮に今記憶が戻ったとしても、この幻想郷ではなんの意味もなさない。

必要なのは記憶ではない……！

まずは行動。

幻想郷中を歩き回って探す。

自分の名前を……！！

それが最初！

幸い、幻想郷という枠組みはそれほど大きくない。

日本という島国と比べれば、たいしたことない。

一日中にとはいかないが、歩いてまわりきれるほどのサイズ。

善は急げ、だから急ごう。

一刻も早く。

もたもたしていると自分の命にかかわる。

そして名前を探すもっとも重要な理由……これはおそらくの予想でしかないが、

この世界においての名前を見つければ、ある程度の特殊能力を得られるだろうということ。

そして間違いなく基礎能力の向上。

名前を見つけ、存在が安定すれば、当然行動しやすくなるし、その

上霊夢や魔理沙みたいに、
人にあるまじき能力を持てるようになるかもしれない。
いい例が十六夜咲夜。

ただの人間が、吸血鬼の運命視によって得られた名前をもらって、
『時間操作』なんていう、
幻想郷においても規格外な能力を習得。
勿論代償は安くなかった。
だが、十六夜咲夜は間違いなく名前の力で能力が発現……！！
早く……一刻も早く自分の名前を探さないと。

十三話　油断

当然……

そりゃあ当然だ。

フランドールは無邪気ではあるが馬鹿じゃない。

頭は切れるほうだ。

私なんかよりよっぽど。

それが、三手に分かれた獲物を三手に分かれて追うなんてミスするわけがない。

つまりはこういうこと。

分身したフランドール全員が私を追ってきた……！！

当然……！！

3分の1の確立で誰かがこうなっていた。

魔理沙はほうきと妖夢を抱えて走りながら後ろを振り返った。

8体……フランドールは8つに分裂している。

しかし、これはチャンス……！！

本来、フランドールのフォーオブアカインドという技は、

分身の技ではない。

自分自身を増やす技ではないのだ。

分裂。

何人に増えようが、実力としては全部合わせてもとの強さ。

だから今魔理沙を追ってきているフランドールは、

そもそも１６体のうちの８体であり、全部あわせても本来のフランドールの力の二分の一しか持ち合わせていない。

更に一体一体はその８分の１。

余裕……！！

余裕で倒せるレベルだ。

一体ずつ少しずつ戦闘不能にしていけば、簡単に凌げる。

まぁだけど、それは理論上の話。

実際には、魔理沙の知らない事実がいくつかあった。

分裂したフランドールの放つ弾幕の数……
力が１６分の１の状態の分身は、弾幕の数も１６分の１か？
魔理沙は気づく。
おかしい……
どう考えたって一体一体の弾幕の数は本来の１６分の１じゃない……！！
事実、何体に分裂しても、一個体の放つ弾幕の数に変わりはない。
魔理沙はそれを今の瞬間まで知らなかった。
そしてもう一つの事実。
これは重要……というより、見落としは命取り。
フランドールの能力、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。
確かに１６体に分裂して、個々のパワーは１６分の１……しかし能力は？
能力の威力も１６分の１？
そうではない。
能力はそのまま引き継がれている。

もとの個体と同じ能力を分裂した個体が引き継ぐ。

つまり……魔理沙を追う８体のフランドールは、

弾幕の数が本来の８倍であり、かつ触れれば即致命傷というわけである。

魔理沙はそれに気づかない。

ただ反射として今のところは全ての弾幕は避けているが、

そのうち「どうせ１６分の１のパワーしかない弾幕だ、一発や二発くらい直撃したって痛くも痒くもない」、

なんて思い出したら危険……！！

一発が致命傷。

魔理沙の負うリスクはあまりにも大きい。

想定外……！！

三手に分かれれば、フランドールも三手に分かれて襲ってくると、
確実に三分した戦力なら勝てる自信があると、
だからこそ魔理沙、パチュリーとあの十字路で別れたのに……
アリスは長い廊下を立ち止まって振り返った。
やはりいない。
フランドールはアリスのあとを追ってきていない。
考えもしなかった、三人のうち誰か一人に狙いが集中するなんて……
だけど、考えてみればまずい。
フランドールが三手に分かれると思っていたからこそ、アリスは二人と別れた。
当然、魔理沙、パチュリーも同じ考えだろう。
つまり、魔理沙かパチュリーのどちらかは、予想外の事態に追い詰められている。
特に魔理沙は、妖夢を背負っている。
助けに行くなら魔理沙か……
いや、魔理沙ならいよいよとなれば壁を壊して館を出る。

壁さえ壊せばあとは簡単。

日光に邪魔されてフランドールは外へ出れないし、妖夢だってその辺の安全そうなところへ放置しておけばいい。

ならパチュリーは？

助けに行くなら……

十三話　油断（後書き）

土曜に定期更新すると言ってたにもかかわらず、先週できなくて申し訳ない。
何か用事があって忙しかったとか、そういうことではなく、忘れていました。
何か更新した気になってすっかり忘れていました。
はい、すいませんでした。

少し遅れましたが、今話が先週土曜の定期更新の分ということになります。
今週の分もきちんと更新するつもりです。

では、これからもよろしくお願いします。

十四話　疑問

「ふぅ、うまくいったわ」

魔理沙、アリスと別れたすぐ近くの部屋でパチュリーは息をこぼした。

「作戦通りね……」

パチュリーはドアを開けて、本当にフランドールが追ってきてないか確認して

「よかった、うまくいったわ」

パチュリーは、フランドールが魔理沙を追っていったのか、アリスを追っていったのか見てないが、

おそらく分裂した8体全員が魔理沙を追っていっただろうことは予想できた。

とはいえパチュリーが仕組んだことではない。

魔理沙やアリスが考えたように、たまたま三分の一に当たったというわけでもない。

魔理沙が標的となったのには一つ、明確な理由がある……

血の匂い……

魔理沙が抱えて走っていた妖夢は大怪我を追っていた。

当然出血！！

魔理沙が妖夢を抱えて走ったなら当然、フランドールは魔理沙を追う。

そもそも、フランドールがパチュリーたちを追ってきたのも血の匂いにつられたから。

なにも魔法使い三人を殺そうと追ってきたわけではない。

まぁ、偽霊夢のせいで興奮したフランドールは無意識に弾幕を撃ち続けていて、

結果的に抵抗しなければ殺されるだろうけど。

パチュリーは図書館から持ち出してきた魔道書を開いて呪文を唱えだした。

「魔理沙……悪いけどしばらくおとりになっててね

くれぐれも死なないように……」

３２……！？

無理無理無理！！

絶対無理！！！

フランドールは先ほどの分裂でその数を３２体まで増やした。

妹紅は泣きそうになりながらフランドールに背を向けて廊下を走り出した。

「ずるい、ずるいぞ

なんだその技は！！」

「ずるくないよー

あなただって分身すればいいじゃない」

「できるか！！」

「遠慮しなくていいよ

ほらほらー」

走る。

妹紅は廊下を全速力で走るのだが、フランドールはそれを追うのだが、

フランドールは違和感に気づいていた。

なぜ外に出なかったのかと。

日の出ている今であれば、壊れている壁から館の外へ出ればそれだけで安全圏。

こうやって息切れするほど廊下を走る必要はないし、殺される心配もなくなる。

蓬莱人だから本当に死ぬことはないだろうが。

わざわざリスクの高い廊下を選んで逃げたのは何故か。

フランドールのたどり着いた結論はこうだ。

何かある。

何かあるが、何があるのかは分からない。

でも、必ず何か、蓬莱人は策をもってこの廊下を走り出した。

それは間違いない。

そうでないとこんな無意味なリスクを自ら背負うわけがない。

フランドールはこう考えたのだ。

しかし……

深読み……

フランドールの考えすぎ、実際妹紅が外ではなく廊下を選んで走ったのは、

あせっていたから。

ただそれだけ。

いうなればミス……！！

単純な選択ミス！

フランドールからすればこれは予想外のチャンス……

チャンスのはずが、考えすぎたあまり手が出せない。

何かあると思い、手が出せない。

何もないのに……実際には何もないのに……！！

そして、フランドールが手を出さないことは妹紅にとっては大きな幸運。

ラッキー……！！

もしもフランドールが考えすぎていなければ、妹紅が廊下を走り出して

ほんの数分でやられてしまってもおかしくない。

それが、まったく手を出してこない。

妹紅はまったく仕掛けてこないフランドールを不思議に思いながら廊下を走り続けた。

十五話　変更

ルーミア、チルノ、外来人の男の三人は一階廊下を歩いていた。
この広い紅魔館で慣れていない三人はなかなか出口にたどり着けずにいた。
玄関を探しているわけではないが、窓すら見つからない状況だ。
このままではいつまでたっても館内を徘徊し続けることになりそうだ。
「お兄さんは、名前を探しに行くんだよね」
男の数歩斜め前を歩いていたルーミアが前を見据えたまま尋ねた。
「あ、ああ、君たちも知ってるだろう
名前は重要な体の一部だ
特にこの世界においては意味が大きい」
例えば人間離れした能力だったりを修得できたりね、
と男は答えた。
「安易な考えかもしれないけどとりあえず名前を見つければ何とか生き残れるんじゃないのかってね

もとの世界に戻るまではこっちで生活しなきゃいけないわけだろ」
男が言い終わるとルーミアは立ち止まって
「……安易……本当にね……」
「え……？」
男はルーミアがあまりにも真剣に、訴えるような声で言うので驚いた。
「安易過ぎるね……少し……いやかなり考えが足りないんじゃないの？
あなたは人間でしょ？」
「え……まあそうだが」
「いいこと教えてあげる
幻想郷のルールとして、何かよっぽど特別な理由がない限り妖怪は人里の人間に手を出してはいけないの
そういう決まり……もう千年以上も昔からね
でも……それ以外……
森だとか竹林だとか湖だとか……
そういうところに迷い込んだ人間は例外なの

勿論、妖怪は情けなんてかけないよ
今後一生ないかもしれないチャンスなんだからね
長い長い一生の中で二度とないかもしれないチャンスなんだからね
あなたが私たちの前に現れたときに、門番が驚いてたでしょ
なんでかわかる？
この湖の周辺は勿論妖怪の手出しできる領域……そんなところで無力な人間が一人ぽつんといたら
狙われないほうがおかしいって……
人里から飛び出してきた人間は妖怪に食べられちゃう
もうずっと昔から続いてきたこと
私が生まれるずっと前からね」
男はなんだそんなことかといわんばかりに得意げに返した。
「心配ないさ、どうにかなる
名前さえ見つければもう人里に篭ってしまえばいいんだ
何とかなるさ」

「……」

まったく耳をかそうとしない男に、ルーミアは肩を落とした。

考える……

考えた結果、男が生きるために選んだ行動が、やはり最短の死亡ルートでしかないという結論に至る。

「あのね、ひとついっておくと

お兄さんは名前の力が絶大って知ってるようだけど、勿論制限はあるよ？

いうなら、名前を見つけるということはまずただの可能性

お兄さんが自分の名前を見つけたとしても

それで特殊能力が手に入るだとかは考えないこと

人間には才能という個体差があるようにね

幻想郷の妖怪にだって個体差があるの

運命的な個体差がね

それが名前」

急に真剣に話し出したルーミアに男は戸惑っていたが、言うべき台詞は一つだった。

「わかってる」

まるではじめから知っていたかのように頷くふりをする。

「だけどそれは裏を返せば少なからず可能性はあるってことだろ

その可能性に賭けてみるってのは駄目なのかい？」

「だから……！！

まず、その可能性までたどり着けないって言ってんの！！

それから仮に名前までたどり着いたとしても、

あなたの望むようなランクアップは望み薄！！

１から１００までランクがあったとして、

１００のランクが１０いるなら、９９のランクは１０００いると考えていい

９８は１００万、９７は１０億

１のランクがいくらいるかわかる？

名前がわかったところで生き残るのに有利になる確率なんてほんの一パーセントにも満たないの！！」

「わかった、わかったがそこは人間お得意の努力で何とかするさ

きっと何とかなる」

「わかってない……！！

わかってないね！！

私の能力知ってる？

『闇を操る程度の能力』さ

しょぼい能力だよ

それでも私の能力は何万分の一という確立の上にあるの

同じ種族でも私ほど闇を自在に操れるやつはいないよ

それでも幻想郷じゃあ三流

あなたたちの言う努力なんてもので埋まるような差ではないの

それこそ命を懸けて初めて差は埋まっていく

少しずつね」

男はようやく悩みだした。

これだけルーミアが言うんだ。

まず間違いなく、名前を探しに出るという選択は間違ってる。

生きてもとの世界に帰りたいなら、とりあえず死なないこと。
わざわざ死にに行くなんて馬鹿なことはしないこと。
「わかった、わかったよ
今度こそ本当にわかった
無闇に行動するのはやめるよ
俺も死にたくないからな」
「本当？
本当にわかった？」
ルーミアは顔を近づけて念を押して、ほっとしたような表情をした。
「それで……」
少し間をおいてルーミアは続けた。
「……？
まだ何かあるのか？」
「一つ提案があるの
別に私はあなたの味方ってわけじゃないけど

無意味に死んで欲しくないからね

少なくともあなたが死なない提案があるの」

十五話　変更（後書き）

土曜の定期更新です。

次回からちょっとＲ１５な表現が出てきます。
苦手な人はブラウザバックでお願いします。

十六話　三人目

フランドールは目を疑った。

自分が今囲んでいた目標、藤原妹紅。

３２という数で四方八方を囲んで逃げ道どころか、人一人通れる隙間もないほどの包囲していた。

絶対に逃がさない、遊び半分といえそのくらいの覚悟で対峙していた。

勿論、フランドールは妹紅から目を離さなかった。

６４の目で死角なく標的を見据える。

それにもかかわらず……フランドールはその瞬間を捉えることができなかった。

気がつくと、妹紅の首だけが宙を舞っていた。

胴体と切り離された首は赤いしぶきを撒き散らしながら、高い天井近くまでとんだ。

「……！！」

何が起こったかわからない。

妹紅の仕業！？

自ら首を……？

違う……違うけど……じゃあ何？

何が起こったの？

フランドールは固まった。

まるでフランドールの時間だけが静止した様に。

考える、考える考える……

「え……？

なんで……？」

わけがわからない。

わけがわからないが……何かが起こってる？

妹紅の胴体は地面に立ったまま立ち尽くしている。

首からこぼれる紅い紅い血に覆われて、何事もないかのように静止している。

フランドールはようやく考えが及んだ。

いまだ妹紅の首が宙を舞ったままの、僅か数秒の間だったが、

それまでにフランドールは混乱から抜け出し、正常な思考を取り戻した。

そしてたどり着いた答えが……

第三者……

誰……？

知らない。

だけど……誰か……

誰かが、妹紅の首をはね、平然と立ち去った？

フランドールが目で捉えることもできないほどの速さで？

だとすれば……

フランドールは再び頭が真っ白になった。

恐怖……！！

今まで味わったことのない浮遊感に見舞われた。

背筋が凍るような……

「待って……」

無意識に口からこぼれた。

まるで全身の感覚がなくなった。
フランドールは今飛んでいる、自らの力で確かに宙に浮いているのだが、
落下するような感覚。
地上数千メートルから一気に落下しているような感覚。
これが人間なら助からない……そして、今のフランドールはひどくパニックに陥っている。
「キャアアアアアアアアアアアアアア」
フランドールの高い声が響いた。
３２の口から一斉に高音が、威嚇するように、
しかし頭を両手で覆うい目をつぶり震えながら。
怖い、怖い怖い。
目で追えないような敵？
そんな敵が……私を殺そうとすれば？
成すすべはない。
気がつけば血まみれ、全身を切り刻まれておしまい。

怖い怖い怖い。

「いや……いやいや、いやだよおおおおおお

助けて、たすけてタスケテ……助けてよ」

バシャ、と、水風船が勢いよく地面にぶつかり、跡形もなくはじけたような、軽快な音がした。

フランドールは顔を上げなかった。

見なくてもわかる。

はじけたのだ……文字通り……天井近くまでとんだ妹紅の頭部が落下し、

その中身をぶちまけ、真赤にはじけたのだ。

その瞬間、なんともいえない感覚がフランドールの左胸を通った。

違う……なんともいえない感覚だったのではなく、声にならなかったのだ。

あまりの未知の感覚に？

あまりの壮大さに？

違う、声が出なかったのだ、物理的に。

生物の体の構成上声が出なかったのだ。

なぜ？

二本の剣で心臓とのどを突かれたからだ。

心臓とのどを貫通。

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い……痛い？

殺された……

３２のうちの一体だが、フランドールは確実に死んだ。

剣を突いたのは、まるで西洋の童話にでも出てきそうなほど立派な鎧を身にまとった人間だった。

頭部の防具はない。

フランドールの残りの３１体が見たその鎧の人間の姿はまるで、

「霊……夢……？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4117m/

とりあえず幻想入り

2010年10月26日12時45分発行